

第二十九回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

鎌倉時代の法華経観

袁 輪 顕 量

皆さん、おはようございます。「鎌倉時代の法華経観」と題しまして、お話をさせていただきます。

私が東京大学の一年生になった時、駒場の同級生に、日蓮宗のお寺の出身だということを申し上げたら「日蓮宗って、ちょっと怖いわ」と言われたことを覚えております。多くの学生さんたちは、身近なところでお寺さんとかお坊さんに接して日蓮宗を理解しているのではなく、教科書に出てくる記述等からイメージを作っているのは、間違いなと思います。三原所長の話聞きまして、ふと思いついたところがございます。

鎌倉時代において、法華経をどのようなものとして捉えていたのかを考えてみたいと思います。ただ、急に鎌倉時代になって法華経が新しく捉えられたというわけではなく、実は、その前の時代からの流れが存在しています。中世の時代というのは、奈良・平安期に展開した仏教が最も花を開かせた時期でもありました。その中で大きく注目できる点は、「法会」という經典の講説等ではないかと思えます。そのような例の一つとして、比叡山の麓にある坂本で行われた勧学会の記述を、最初にご紹介したいと思います。

この勧学会は、三月十五日、または九月十五日に行われていたといわれています。比叡山の堂衆系のお坊さんたちと、朝廷の中で官僚さんになるための勉強をしていた若い学生さん、紀伝道の人たち。つまり朝廷の中で活動してい

く人たちとお坊さんたちが、読経を通して開いていた行事といわれています。

「十四日ノ夕ベニ、僧ハヤマヨリオリテフモトニアツマリ、俗八月ニ乘リテ寺ニ行ク」とあります。十四日の夕方に、僧侶は比叡の山から下りて麓に集まり、俗人は月の光を浴びながら寺に出かけるというような、このような記述から始まりまして、「十五日ノ朝ニハ法華経ヲ講ジ、夕ベニハ弥陀仏ヲ念ジテ、ソノノチニハ暁ニ至ルマデ、仏ヲホメ、法ヲホメタテマツリテ、ソノ詩ハ寺ニオク」という記述が出てまいります。朝方には法華経の講説、夕方には浄土教の阿弥陀さんを念じていました。午前中に法華経関係、夕方に浄土教関係のものを修すというのは、『三宝絵詞』が著述された時期、平安時代の十世紀には既にでき上がっていたと考えられます。

また、十一世紀の資料として大変興味深いものが、藤原道長の栄華を伝えた『栄華物語』の中に登場いたします。藤原道長は、法華三十講というものを私邸で行ったことで、大変有名になっていきます。それ以前からも、法会を中心として、仏教界の指導者になるような人を育てていくという在り方は、奈良時代末頃から確認することができ、奈良の都におきましては、興福寺の維摩会、宮中の最勝会。そして、薬師寺の最勝会という、三つの法会がとても重要なものとなり、「南都三会」という名前で呼ばれて、その聴衆、それから講師を経た人たちが、僧綱といわれるお坊さんの世界の代表者に任命されていくという制度ができ上がっていました。

このように、公的で重要な法会が整備されていくのですが、藤原道長が登場するにあたり、貴族の私邸においても、法華経の講説等が盛大に行われるということが出現してまいります。藤原道長は、とても興味深い人物であると歴史学の世界でも、文学の世界でもいわれるところがあります。本人も、法華経の読誦を行うとともに、「東宮、宮々に皆このことを同じく勤め行なはせたまふ」と述べられています。親族一同、朝廷の天皇家の方々にも、法華経の読誦等を勧めていたという話が伝わっています。

その中の「うたがひ」という名前で書かれている章の中に、「南北二京の僧綱、凡僧、学生」等を集めて、論義法

会を行ったとの記事があります。これが法華経の三十講で、毎日一品ずつ講じます。一品ずつだったら二十八日にしかならないのではないかと思われるかもしれませんが、そのとおりでございます。実は二十八品以外に、法華経の開経と結経が講説されており、それで三十講になるわけですが、一講ずつに講師の方を一人ずつ割り当てて、一日一つずつ講義をさせていきました。

そのときの状況を伝えているものとして、「ただ今はこれを公私の交ひの始めと思ひ、召さるるをば面目にし、さらぬをば口惜しきものに思ひて、学問をし、心あるは灯火をかかけて経論を習ひ、あるは月の光に出でて法華経を読み、あるは暗きに空に浮かべて誦し、ひねもすによもすがらに営み習ひて集まるたるに」とあります。藤原道長が主催する法華三十講に招請される、「出仕してください」とお願いされることを、公私の交わいの始めであると考え、召されることを面目のあることであると考えて、呼ばれなかったことを口惜しい、悔しいものと思つて当時のお坊さんたちが勉強したということが、『栄華物語』の中に伝えられています。

こちらは現代語訳ですけど、「これが交流の始まりだと思つて、法会に出仕するよう招かれることを面目のあることだと思ひ、招かれないことを悔しいことだと思つて、学問をする。道理をわきまえている者は、灯火を掲げて経論を勉強し、ある者は月の光をたよりに外に出て『法華経』を読み」という感じで勉強していたことが伝えられています。

このときには和歌も詠んでいるようで、伝えられたものが出てきてまいります。「出で入ると人は見れども世ともに驚の峰なる月はのどけし（出たり入ったりと人は見るけれども、世の中と一一緒に驚の峰に出ている月はのどかなものだ）。これは、霊鷲山を詠んでいるのでしょうか。また、普門品には、「世を救ううちには誰か入らざらんあまねき門を人しなさねば（世の中を救う家のかなには誰が入らないでありましょうか、普通の門を人が指ささなければ）」「これを集まり誦じたもうも、げにと聞こえたり。さても同じ心一筋なればかかず」という感じで出てまいりま

す。そのような様子で、法華三十講が行われていたことが分かります。

藤原道長は、法華信仰の中でも大変に興味深いことを行っておりまして、常不輕菩薩の行を実践していたという記述が出てまいります。具体的に何をしていたかといえますと、通りに出て、過ぎ行く、道行く人たちを礼拝するという行です。常不輕菩薩行として出てきたりしますけれども、道行く人たちが皆、仏たる性質を持っていると考えて、礼拝をするというような行が、この時代に存在したことが分かります。

実際に常不輕菩薩行に関するものが見える資料は、説話の中にも残っておりまして、『閑居友』上巻の第九話がその一つです。慶政という、九条家の出身の方が「あづまの方に不輕拝みける老僧の事」というタイトルで残している文章があります。ここに常不輕菩薩の行をしていたという記述が出てまいります。「中ごろ、あづまの方に、年いとたけたる聖の、いひ知らず汚げなるが、髪長く、着物穢れたるありけり。見る人見る人、拝みて『我深敬汝等。不輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏』の文をなん唱へける。拜むとても、なをざりの気なし。誠を致してぞ見えける。すべてこの不輕といふ事の心は、衆生の胸の底に仏性おはしますを、敬い拝み奉るなり」と。このように、十三世紀の初頭、ちょうど日蓮聖人が登場される頃に、多くの人々をただ礼拝するという常不輕菩薩行がいろんな所で行われていたことが分かります。

また、この時代に行われていた興味深い法会に、千日講というものが登場いたします。これは、貴族が主催しています。大変力のある家の一つである近衛家の近衛兼経の記録の中に「千日講願文」というのが残っていて、兼経のお父さんに当たる家実が行っていた千日講の様子が記されています。その中の記述を見てみますと、「奉図絵阿弥陀如来像一千体、奉模写素紙妙法蓮華經百部八百卷、無量義、觀普賢等經各百卷并一千卷。尊像者每日卒一体、妙典者每日卒一卷。奉摺写阿弥陀、般若心等經各百卷、同壽命經一千卷、阿弥陀經者付開經、般若心付結經、壽命經者每日一卷奉称揚讚嘆矣」と、このような記事が出てきています。

このときの貴族の人たちが、千日講という千日間にあたる講義を行っていたのですが、この中で使われていた経典は、妙法蓮華経、無量義経、観普賢経の法華三部経、それ以外にも、阿弥陀経、般若心経とか、寿命経も使われていました。いろいろな経典に対する信仰を一人の貴族が持っていました。法華経は結構大事な経典として位置づけられていますけれども、それ以外の経典も一緒に信仰するというようなことが行われていました。

さて、では実際に経典の講説について見ていきたいと思います。この時代に、経典の講説というのは大変盛んに行われていまして、多くの学侶畑のお坊さんたちが営んでいたものです。講説のひな形には、「経釈」という名前であれば資料が、大きく分けて三種類出てまいります。物釈、経全体に対する解説。それから、巻釈、一卷ごとに対する解説。それから、品釈、品に対する解説です。

経典の講説に関しては経釈と呼ばれる解説文が広く作成されました。そこには、大体「三門釈」といわれる形式が存在していました。経典の大意。それから、題目を釈す。それから、文章一つ一つを取り上げて解釈を加える入文判釈、あるいは入文解釈と呼ばれていますが、三つの視点から解説が行われていました。この「大意、釈題目、入文判釈」の三門釈は、中国で経典を解説するときに使われた形式の一つであったようでありまして、一番古い形式は、羅什さんの門下生である、道生の『注法華』に見つけ出すことができます。中国南北朝時代の経典講説の伝統と考えることができます。

その経典の講説をしたあとに、論義。ギの字が、議論の「議」ではなくて意義の「義」でありまして、「義を論ず」と読ませるのが正しいのだと思います。法華経の講説に対して行われた論義の資料というのも、結構残っています。中世の最も格式の高い法会というのは、法勝寺の御八講、宮中で行われた最勝講、仙洞の最勝講でした。この法会は、実は鎌倉時代を超えて、南北朝から室町の頃まで行われていました。

記録として残っている『問答記』等を見てみますと、法華経が講説されたときには、まず二問、論義が行われたよ

うです。一問目は、經典の文章に合わせて質問が出されていました。内容的には、講師の所属する宗に関係するものになります。そのときに講説された經典の文章をきっかけとして、議論がなされていることが分かります。二問目は、講説された文章に関係なく、講師の教理に関連するものを質問されます。講説された巻に登場する文言を「文論義」、幅広い教理に関する議論を「義論義」と言うことができるのではないかと思います。これは私がつけた名称で定着していません。あまりよくないのかもしれませんが、文章の論義と義の論義ということで分けていいのではないかと思っています。

当時、法勝寺は八角の塔が建てられていました。七重か九重の塔だったと思います。中国の影響を受けているものといわれています。塔の後ろ側に僧房がありまして、僧房の右手の区画に、院家があります。もしかしたらお坊さんたちが、二種類いらっしやったのではないかと想像をかき立てられます。

そのように經典の講説が盛んに行われていた時代に、一方で、持経者という方たちの伝統も存在していたことが分かります。持経者自体は『日本靈異記』等にも登場してきますので、九世紀の初頭ぐらいから確認されます。これが注目されるのは、鎮源というお坊さんが『大日本国法華經験記』を書いて、その頃からしばらく注目されるものになっていきます。持経者の基になったのは、法華經の法師品の記述であろうと考えられますが、經典を持つ者たもという人たちが出てまいります。

「持つたも」とはどういうことかといいますと、經典を暗誦していたというのが大事なようでありました。『日本靈異記』の中に「憶持法華經得現報」という章がありますが、「大和国葛木上郡に一人の持経の人有り、年八歳以前に法華經を誦持するも、意に唯だ一字、存することを得ず」などという用例が出てきていまして、「經典を暗誦して持つたもている者」の意味です。サンスクリットの原語は *dhārayati* が、「記憶して忘れないこと」の意味だといわれていますので、經典を暗誦するという行為が、持経者の意味に非常に近いのではないかと考えられます。

この人たちが社会の中に存在していたというのも、一方で否定することができない部分であります。朝廷によって奨励された経典暗誦政策に影響されていたのではないか。当時のお坊さんたちに課されていたものに、法華経とか、金光明経だとか、仁王般若経など、幾つかの経典を暗誦するということが出てまいりますので、それに影響されているのであろうと考えられています。

この持経者が注目される時期は、『大日本国法華経験記』以降であります。この『験記』が制作されたのは長久四年（一〇四三）頃といわれていますので、十一世紀の半ばぐらいに持経者が結構注目される存在になっていて、そのような伝統も、鎌倉期まで流れていると考えてもいいと思います。『験記』の中の一つのお話として、書写山で活躍しました性空の例を一個挙げさせていただきました。「一乗を受持し偏に仏恵を期」し、「深山幽谷に廬を結び住」と伝えられていて、自らの行として法華経の暗誦を行っていたことが記されている人です。

山林を基盤としながら活動するタイプの持経者であったことが指摘されている人物で、「自行既に熟して化他のための故に、深山より出来して、人間に住す。所謂書写等の処々の練若なり、僧俗市を作し、貴賤雲の如く集る。……乃至最後は兼ねて死時を知り、室に入って座禅し、寂靜安穩にして法華経を誦し、息を止めて入滅せり」というような言葉が出てきます。これは、自行のためにはどうも山の中に籠もって修行をしていて、化他のために、人々を救うために深き山から出てきて、人々の間に住した、その不思議な力に、お坊さんたちも俗人たちも市を成すように集まってきたと。たくさんの人たちが性空の周りに集まったということが伝えられていて、法華経を読誦することによって不思議な力を得て、それを人々の間で役立てるといような、そういうイメージが、『法華験記』の中から浮かび上がってまいります。

また話が元に戻るような感じで申し訳ありませんが、法華経をどのようなものとして、当時のお坊さんたちが講義していたのかを考えると、十三世紀の初頭に、天台宗のお坊さんが実際に法華経を説いたときの記録が、現在、活字

になって、私たちが直接目にすることができるようになっていきます。

その中から一つ、三井寺の僧侶であった方が記した『法華経勸進抄』が伝わっています。この史料は、安貞二年（一二二八）に成立したものであるということが分かっています。当時、既に法然の浄土教が世に広まりかけていて叡山の衆徒が法然の廟所を襲った「嘉祿の法難」があった次の年に、三井の園城寺で恐らく行われたであろう法華経講説の経釈です。

そこに出てくる最初の文章が非常に分かりやすく、法華経の受容を考える上ではとても興味深い史料です。「夫れ妙法蓮華経とは三世諸仏、世に出給う本意、一切衆生の仏に成る正しき道なり。仏も説き難くして此を説き給へり。故に、四十余年の霜を送りて後に説き、人も聞き難くして此を聞く。故に五千の上慢の輩を立てて、後に聞く。之に依りて方便品に説きて云く、諸仏、世に興出したまうこと、懸かにして遠く値遇すること難し」と。法華経というのは、一切衆生が仏になる正しき道であると。よく人口に膾炙する表現です。あらゆる人々が残りなく仏になることができる、そういう道を説いている教えであると位置づけていたことが分かります。

また、「たとひ世に出でたまへども、此の法を説くは復た難し。無量無数劫にも、是の法を聞くこと、また難し。能く是の法を聴く者、斯の人も亦復た難しと宣たまへり」と出てきます。それを、「情ら我が身のことを思うに、涙双眼に浮かび、悦び一身に余れり。その故は、生を辺国辺土に受けることは、うらみなりとも雖も、法を末代末世に聞くことを得るは、此の悦びなり」という文章が続き、興味深いです。

もう一つ面白いところは、この経典を聞いたりすることによって何が可能になるかということです。「宿習に限り有りて成仏すべき時到来ぬれば、法華経を聴聞し結縁したてまつらばや、受持し読誦し奉らんと思ふ心の発るなり。其の一念の心、発る時に、曠劫多生の間、或いは悪道に生まれ、或いは善道に生まる。流転三界のほど、若しは畜生なり、若しは人類なり、作し所の悪業、発し所の妄想、悉く消えん」と。つまり、罪障を消滅することができるとい

うイメージが語られているのであります。

同じ史料に、「次に主題の名字は、かりの功德を申すべし。妙法蓮華経と云う五字を、首題の名字と申すなり。この五字を一度も耳にふれ奉り、再び口に唱え奉る、無量劫の罪障を滅して、不可量の功德をうるなり」と。つまり、無量劫の罪障を消すことができるのであるということを、講説の中で説いていました。「安樂行品に云わく、是の法華経、無量の国の中に於いて、乃至名字だにも聞く事を得べからず。何ぞ況んや見ることを得て、受持読誦せんやといへり」と出てまいります。このように、法華経に対する位置づけというのは、一切衆生の成仏と罪障の消滅ということの二つが、当時、法華経に対する理解であつただろうと考えられます。

それを傍証してくれるようなものが、中世の時代に天台で行われていた「朝懺法夕例時」という言葉ではないかと思えます。これは、平安期から比叡山で行われていたものです。朝には法華懺法を行い、夕方には念仏で、例時作法を行うという意味です。「朝夕のれいじせん法に上りあはんと宮みしも」という文が出てきて、十二世紀の後半期に、朝夕に例時懺法が行われていたということが分かります。

建永元年の記事の中にも、「朝懺法之後、可有朝座問答、夕例時之前、可有夕座問答」という記述があります。『門葉記』という史料の中に登場しますので、十一〜十二世紀の頃に比叡山で、朝懺法夕例時という名前で呼ばれる、午前は法華経、午後は浄土教を誦むということが行われていたと分かります。

十三世紀の初頭、日蓮聖人が登場する少し前に作られた『宝物集』という史料が存在します。ちょうど治承の兵乱等があり、奈良の都が焼き討ちされ、東大寺、興福寺等が灰燼に帰すという大きな事件があつた時に作られた説話集の一つといわれているのですが、興味深い記述が出てまいります。

「しかりといへども『懺悔すれば、所有の煩惱ごとごとくぞく。懺悔すれば菩提の花ひらく。懺悔すれば大円鏡地を見る。懺悔すれば、宝所に至る』。有相・無相・利利居士等の三懺悔をしへ給へり。よくよく心を得て、業障

を懺悔すべし。はじめに有相の懺悔と申すは、無始生死よりつくりし罪をくひて、発露し涕泣して、あるいは本尊に向て礼拝し懺悔し、あるひは賢聖にむかつてかたり、懺悔するなり。次に無相の懺悔と申すは、一切の業障は妄想より生じて、その体といふものなし。これを観ずるを理の懺悔と云うなり」と。無相の懺悔というのは、一切の業障は妄想より生ずるということを前提にします。観普賢經の中から登場してくる記述でございませう。「刹利居士の懺悔と云は、正法もて国を治し、六祭日にももの命を殺さず、境のうちの殺生をとどめ、父母に孝養するを申したる也」というような言い方をしています。有相・無相・刹利居士等の三懺悔という言い方が出てきます。

このように懺悔の記述が登場してきます。法華經を懺法という観点から見ると、法華經によつて懺悔をすることが可能になると位置づけられていた時代に、もう少し違った見方をしたのが、日蓮聖人ではないかと思ひます。それが何かというと、皆様がよくご存じの色読、身読であります。法師品第十に「若しこの經を説かん時、人ありて悪口をもつて罵り、刀杖瓦石を加うとも、仏を念ずるが故に心に忍ぶべし」との記述があります。『如説修行抄』等の中で、「恐は天台伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし」という言及が登場しています。色読の例としてよく出される箇所は、『法華經』勸持品の「数数見擯出 遠離於塔寺」であることは、皆さんもよくご存じの点ではないかと思ひます。

日蓮聖人の『転重軽受法門』の中にも、譬喩品の文章とか、勸持品の文章または安樂行品の文章を出されて、「此等は経文には候へども、何世にかかるべしともしられず。過去の不軽菩薩、覚徳比丘なんどこそ、身にあたりてよまいらせて候けるとみへはんべれ。現在には正像二千年はさておきぬ。末法に入りては此の日本国には当時は日蓮一人みへ候か」という文章を残されています。過去では、法華經のとおりのことを身に読まれたのは、不軽菩薩、覚徳比丘の二人だけでも、末法の世においては日蓮一人であると述べられておられます。

こう考えてきますと、鎌倉時代に『法華經』はどのようなものとして見られていたのかがわかります。生きとし生

きるものが仏となることができると説き、また、犯した罪障をことごとく滅することができると考える经典であると考えていたことが分かります。この考え方というのは、经典の講説を通じて、広く社会に広まったと推定されます。

一方で、『法華経』を読誦する持経者の伝統や、『法華経』に書かれていることをそのとおりに実践する、身に読むという受容の仕方も存在しました。これは、先ほど述べました「一切衆生 悉有仏性」、「罪障消滅」というのとまた少し違った位相の受容、法華経に対する感覚であると思うのですけれども、经典自身が説く「五種法師の行」や「常不軽菩薩の行」などが影響を与えていて、実際に実践するという、そのような位置づけも存在していたと思います。

常不軽菩薩行の実践は、藤原道長の例や、『閑居友』に出てくるあずまの方の老僧のエピソードがありました。そのように考えますと、中世の時代には、法華経観といっても数種類、大きくは二種類でしょうか。言説の上で語られるものと、実際に自分たちが行うものという、その二つの法華経観があったと言えるのではないかと思います。

以上をもちまして、お話を終わりとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。